

金沢あまやどり茶房
雨降る街で、会いたい人と不思議なひと時

編乃肌 Aminohada



アルファポリス文庫

プロローグ

雨降る街、古都『金沢』。

情緒あふれるその地にはひとつ、ひめやかに囁かれる噂がある。

なんでも雨の日にだけ茶屋街に現れる、不思議な茶房があるとか。

そこで雨宿りをして、美味しいお茶と甘いお菓子で一息つけば、必ず『会いたい人』に会えるという。

案内をしてくれるのは二羽のツバメ。迎えるのは可愛らしい双子の店員と白髪の美丈夫。

もしあなたにも心から『会いたい人』がいるなら、傘をさしてその茶房を探して

みて。

きつと彼等が会わせてくれる。

——雨が降ったら、いらっしやい。

*

薄暗い山の中。

ひつくひつくとしやくり上げて、十もいかぬ歳の幼い少年は、冷たい地面の上で体を丸めていた。

「痛いよ、寒いよ……」

着ている黄色いカッパは泥だらけ。

柔らかな頬や腕には擦り傷が走り、右の足首は捻ったのか赤く腫れている。

ぎゅつと、少年はズボンのポケットから出したお守り袋を握り締めた。大好きな祖母が作ってくれた大切なものだ。

そもそもこんな状況になってしまったのは、その祖母の言いつけを少年が破ったことが原因だった。

『こら、ハル。こんな酷い大雨の日にどこ行くんけ？ 今日山になんて行ったらあかんよ。転んで怪我でもしたら大変や。雨が止むまで家で大人しくしとりまっし』

出掛けようとする少年を、祖母は地元の方言交じりの話し方でそう窘めた。一度は少年も素直に「うん」と頷いたのだが……結局こっそりと家を出てきて、この有様である。

土砂降りの雨のせいで地面がぬかるんでいたため、山道を踏み外して転がり落ちたのだ。

「ごめんなさい、おばあちゃん……」

普段の大人しい少年ならこんな無茶はしない。

だけど彼はどうしても、危険があらうとこの山に来たかったのだ。

……『あの子』が今日こそ、待っている気がして。

「冷たい……」

鬱蒼とした木々の狭間から、無数の雨粒が落ちてくる。叩きつけるような雨は止

む気配はなく、容赦なく体温を奪っていくが、少年はもう一步も動けそうになかった。
瞼が重くて視界が霞む。

意識もだんだんとおぼろげになっていく。

自分はこのまま死んでしまうのだろうか？

もはや頬を伝うものが涙なのか雨なのかもわからないまま、か細い声で「誰か助けて」と祈ったときだ。

ふわり——と、ぬくもりが頭に触れた。

「え……？」

長い指先がゆつくりと、慈しむように少年の髪を梳く。両親や祖母に撫でられているときと同じような、ただただ安心感を与える手つきだ。

「もう大丈夫。私が助けてあげるからね」

そう囁く声はどこまでも優しい。

痛みも少しばし忘れて、ゆるゆると少年の体から力が抜けた。

「あなたは……だあれ……？」

「ひみつ。いいからお眠り」

「あ……」

相手の正体を確かめたくとも、急激な眠気と心地よさに襲われて、顔を上げることすらできない。

ポンポンと頭を撫でられ、少年は諦めて微睡みに身を委ねる。

もう不安なことなどない気がした。

意識を完全に失う前、少年が最後に見たものは、吸い込まれそうな青い空だった。

一章 雨降る街の不思議な茶房

しとしとと天から落ちる雫が、窓ガラスに無秩序な線を描いている。空は灰色の曇天。季節は四月の中頃で、ここ連日の雨により、満開だった桜はすっかり散ってしまった。

だが雨のひとつで「喜一憂してはいられない。ただでさえここ石川県金沢市は、年間の降水日数が日本一となることが多い雨の地域なのだ。

教室の窓際の席で、陽元晴哉は頬杖をつきながら、無感動な瞳でガラスの向こうの雨模様を見つめていた。そんな彼の耳に、クラスメイトの女子たちのお喋りが飛び込んでくる。

「あーあ、これは雨、まったく止む気配ないなあ。放課後に彼氏とデートの予定だったのに」

「天気予報チェックしなよ。一日中傘マーク。残念でした!」

「抜け駆けで彼氏なんて作った、文字通り天罰ですー」

きゃははとはしゃぐ声は、少々ボリュームが大きい。

休み時間でそこら中が騒々しいので、そこまで悪目立ちしているわけではないが、女子たち三人が固まる席は晴哉の席のすぐ隣だ。嫌でも内容が聞き取れる。

また別の場所では男子たちの馬鹿笑いが響いて、晴哉は長めの前髪を揺らして「はあ」とこっそり溜息をついた。

この地元の公立高校に入学して一週間とちよつと。

晴哉は見事に教室内で孤立していた。

しかしそれは悲しいかな、進学前から想定済みの事態でもあった。

というのも晴哉は、仕事の関係で離れて暮らす父親譲りの鋭い目つきと、顔立ちはそのこそ整っているのに生まれつき乏しい表情のせいで、どうにもこうにも近寄りたいたいオーラが出ているようなのだ。

オマケに人付き合いが苦手で口下手のため、『一匹狼の不良』なんてとんでもない

勘違いまでされている。内心は狼ごころか小心者な小犬なのに、だ。

だから当然、昔から友達などろくにできた試しがない。

唯一そう呼べるのは、小学生のとき、いささか変わった交流をしていた『あの子』だけだ。

離れ離れになって久しいが、あの子は元気にしているだろうか。

「あ！ ねえ、雨といえばさ——『あまやどり茶房』って知ってる？」

過去に逃避しかけていた晴哉の思考を、女子の高い声が引き戻す。

「あまやどり茶房？」

「なにそれ？」

問われた残りの女子ふたりは知らなかったようで、それぞれそのおかしな店名に首を傾げている。

晴哉も初耳だ。

「なんでも『ひがし茶屋街』の外れにね、雨の日にだけ行ける変わった茶房があるらしいんだよ。そこで一服していくと、どんな相手だろうと『会いたい人』に会わせてくれるんだって」

「んん？ つまりどういうこと？」

「雨天時だけ営業して、晴れの日は休業日ってこと？」

「いや、そういうんじゃないよ。雨の日にだけお店が現れて、晴れの日はどれだけ探しても見つからないのよ」

そこで晴哉は、これは都市伝説とかオカルト系の話かと悟った。そういう類いの話はあまり得意ではない。

晴哉はテレビの似非^{えせ}っぽいホラー番組などでも、普通にビビるタイプである。表情に一切出ないので平気そうに思われてしまうが。

「ただ、雨の日だからって、誰にでも見つけられるわけじゃないらしいよ。店は選ばれた者にしか姿を見せないの」

ますます非現実的な茶房の存在に晴哉が眉を寄せていると、「はいはい！ 俺、その茶房のこと知ってるぜ！」と、急に第三者が割って入った。

先ほどまで馬鹿笑いでいた男子勢のひとり、山口昭^{やまぐちてるあき}だ。

クラスのムードメーカーで、人懐っこい笑顔と八重歯が愛嬌^{あいぎょう}にあふれている。晴哉からすれば、女子の会話になんの気負いもなく入っていけるそのコミュニケーションが羨ま

しい。

「俺の中学のダチがさ、雨の日にひがし茶屋街をうろついていたら、その茶房にたまたまどり着いたらしくて。そこでタタでめちやくちや美味しい和菓子食って、美味しいお茶を飲んできたって！ しかも『会いたい人に会える』ってのはマジな話で、別れて連絡の取れなかった元カノに会わせてもらったらしいぜー」

山口の追加情報に、女子たちは「えー！ うそー！」「マジで会わせてもらえるの？」「私も行きたい！」とさながらなる盛り上がりを見せている。

山口自身は嘘のつけない性格なので、友人からその話を聞いたというのは事実なのだろう。その友人が本当のことを言っているかどうかは、定かではないけれども。

「芸能人とかにも会えるのかなあ。会って一緒にお茶したい」

「選ばれた人にしか店が現れてくれないなら、あんたみたいなお気楽な動機じゃムリじゃん？」

「なによー！ それならあんたは誰に会いたいわけ？」

「俺は女優のユキリンがいいなあ」

そこから彼等は、自分なら誰に会わせて欲しいかについて各々発表し始めた。それ

を右から左に聞き流しながら、人知れず晴哉は呟く。

「会いたい人に会える、『あまやどり茶房』か……」

別にクラスで聞いた噂を信じたわけではない。

わけではないが……なぜか無性に気になってしまい、晴哉は現在、普段の彼からすれば珍しく衝動的に、例の茶房を求めて茶屋街を訪れていた。

「けっこう人いるな……」

こんな雨の平日でも、金沢の人気観光地である『ひがし茶屋街』は人が多い。

昔の面影を残す街並みは、趣ある茶屋建築と紅い出格子で彩られている。居並ぶ店は行列を成しているところもあり、お洒落な和スイーツが食べられる甘味処に、食事処やお土産処と種類も豊富だ。

周囲には華やかな着物を纏った女性も散見される。雨だと情緒ある和傘も目について、どこを切り取っても絵になった。

そんな中、晴哉は学校帰りにそのまま来たため、格好はブレザーの制服姿。情緒な

ど欠片かけらもないビニール傘をさしており、なんだか自分ひとりだけが浮いている気がして落ち着かなかった。

「さ、さっさと探そう」

独り言を言っただけで石畳を歩く。

その茶房の場所については、茶屋街の外れにあるというふわつとした情報のみ。晴哉はとりあえず、茶屋街周辺を根気よく回り、念のため人で賑わう中心部にぎも一軒一軒の店を細かく見ていった。

しかしながら、お目当ての『あまやどり茶房』とやらはいっこうに見つからない。もちろんどの案内にも店名は載っていないし、ネットを検索しても出てきたのは、面白がって記事にしただけの信憑性しんぴうせいに欠けるものばかり。どれも到底当てにはならなかった。

適当な店で店員に尋ねてみるという方法もあったが……それは晴哉にはいささかハードルが高いため、すぐさま却下に。

万策ばんさく尽きた。

「……帰るか」

すべて徒勞に終わったのは悔しいが、断念する他ない。

スマホで時間を確認すれば、三十分以上は探し歩いてみたいだ。

せめてお茶でもしていこうかとも考えたが、店にひとりで入る勇氣すらなく、晴哉はバス停を目指して浅野川大橋あさのがわおほしの方に向かう。

この『ひがし茶屋街』のすぐ傍を流れる浅野川は、別名『女川おんながわ』とも言われ、架かる橋はアーチ型で古きよきロマンを感じさせる。対になる『男川おとがわ』こと犀川さいがわと合わせて、金沢の人々に親しまれてきた景観のひとつだ。

「バス、時間が合うのあったか……ん？」

気もそぞろに歩いていたら、ふと違和感に気付く。

「……ここ、どこだ？」

茶屋街を出て、来た道に戻っていたはずなのに。

立ち止まって辺りを確認すれば、こんな景色、晴哉には覚えがなかった。

石畳がまっすぐどこまでも続いていて、道の左右には古めかしい店が同じくどこまでも連なっている。一見すればまた茶屋街の中にいるようだが、店は軒並み閉まっ
ていておそろしいほど静かだ。

ポツポツと立つレトロな街灯は、まだ夜には早い時間帯のはずなのに、ほのかな赤い光を灯している。糸のような雨は変わらず降り続け、耳につくのはその細かい音だけ。

様子がおかしいことは明らかだった。

ここは見知らぬ異次元で、己は間違つて紛れ込んだのではないかという、ゾッとする想像が晴哉の背を這う。

肩に掛けたスクールバッグの紐をきつく握った。

耐え切れず、晴哉は声を張り上げる。

「あの、どなたかいませんか!？」

「チュイッ!」

「えっ……」

そのさえずりが聞こえたのは頭上からだ。

傘をずらして天を仰げば、二羽のツバメが晴哉を見下ろすように旋回していた。

黒に近い藍色の羽は光沢があり、くちばしは鋭く、顎にあたる部分は赤い。切れ込みのある尾が空を切つて、スイツと飛ぶ姿はどちらも優雅である。

シーズンはまだ少し先のはずだが、『ひがし茶屋街』でツバメを目撃すること自体は決して珍しいことではない。小学生が授業の一環でツバメ見学に来ることもあるし、ツバメが飛び交う茶屋街の様子も乙なものだ。

だけどここはきつともう、晴哉の知っている茶屋街ではないだろう。おまけにツバメたちは二羽とも妙に賢そうで、ただの鳥ではない気がする。

「チュイッ!」

「チュイ、チュイッ!」

ついて来い、と言っている？

ツバメたちはどうやら、晴哉をどこかへ案内したいようだ。

普段なら有り得ない発想でも、いまの晴哉には彼等について行くしか選択肢はなかった。

「ま、待ってくれ!」

見失わないように、晴哉は二羽の尾を追いかけた。

「ここって……」

そしてたどり着いたのは、一軒の店。

ここだけは営業しているようで、引き戸は客を待つようにわずかに開いていた。中からはどこか懐かしいような、いい香りがほんのりと漂ってくる。

いつのまにかツバメたちはいなくなっていたが、屋根の下にはこんもり盛ったツバメの巣があった。

足元には、紺地に梅の花をあしらった細長い陶器の壺。『梅』は金沢のシンボルのな花木で、加賀藩前田家の家紋だ。一本だけ番傘が入れているところから、どうやらこの壺は傘立てらしい。

そしてその壺に隠れるように佇む、ボロボロの木製の立て看板には、達筆な字でこう書かれていた。

『あまやどり茶房、雨天のため営業中。』

美味しいお菓子とお茶セットあります。あなたの会いたい人とご一緒どうぞ

「マジであったんだ……」

晴哉の第一声はそんな素直な想いだった。

というか『雨天のため営業中』って。そんな言い回し聞いたこともない。

ひとまず傘を畳んでみたはいいものの、いざ店を前にするとどうすべきか晴哉は戸惑う。

戸の前で突っ立っていたら、急に後ろから「入らないんですか？」と鈴を転がすような声で話しかけられた。

「いまお客さんは誰もいませんよ。どうぞ中へお入りください。歓迎します」

「そうそう！ せっかく来たんだからお茶していきなっつて」

「い、いや、君たちは……？」

振り返ると、そこにいたのは小さな双子の女の子と男の子だった。

年齢は小学校三、四年生くらいか。

双子だと判断したのは、ふたりの顔が瓜ふたつだからだ。そっくりな男女の双子はレアだと晴哉も知っているが、そうとしか思えないくらい似ている。どちらもくりくりとした大きな黒目に、ぶつくり膨らむ丸い頬。思わず目を惹く、整った愛らしい顔立ちをしている。

男の子の方は少し生意気そうで、黒髪の短髪に藍色の甚平姿。

女の子の方はおっとりした印象で、黒髪のおかつぱ頭に藍色の着物姿。並んでちょこんと立つ様は一對のお人形さんみたいだ。

それにしても、気配なんてまるでなかったのに、この子たちはいったいどこから現れたのだろうか？

「驚かせてごめんなさい。私たちはこの茶房でお手伝いをしている者です。これから私たちが、このお店についてのご説明を……」

「ウイ！ 面倒だから入ってもらえばわかるって！」

「エン、ダメだよ。お客様をちゃんとご案内するのが、私たちのお仕事なんだから」
女の子はウイ、男の子はエンというらしい。

エンは「いいから、いいから」と、窘めるウイを適当にはぐらかして、晴哉の手からビニール傘を奪うと傘立てに放り込んだ。

それから焦る晴哉の背……身長差的に腰の辺りを、ぐいぐいと押してくる。

「えっ、ちょ、ちょっと！」

「一名様ごあんない！」

下手に抵抗することもできず、晴哉は押されるがままだ。子供からは見た目で怖が

られて避けられる人生を送ってきたため、どう対応すればいいかもわからない。

ウイも諦めたのか、困った顔をしながらも戸を両手で開けてくれる。

「お、お邪魔します……」

おそるおそる足を踏み入れると、中は存外普通の店だった。

ごんまりとした空間に、ふたりがけのテーブル席が三つ。

出入口のすぐ傍にレジ台があるが、レジ自体は旧式で、実用品というよりは展示品だろうか。レジ横には生花が飾られており、傘立てにも描かれていた梅の花が、花瓶かびんに活けられて上品に咲き誇っている。

また天井からは和紙製のランブシェードがぶら下がっていて、球体状のそれには二羽のツバメのシルエットがデザインされていた。そこから放たれる柔らかな光が、店内をオレンジ色に染めている。

「あるじ様、あるじ様。お客様です」

ウイが控え目に呼びかけると、奥の市松模様の暖簾のれんが持ち上がる。

「ああ、久方ぶりのお客様だ——いらっしやい、『あまやどり茶房』へようこそ」

ゆつたりと顔を出したのは、和服姿のこれまた美しい青年だった。すつと通った鼻梁に、高い身長。晴哉も百七十五センチと背はある方だが、それよりも高くて百八十センチはありそうだ。

だがそれより特筆すべきは髪と瞳。腰まである長い髪は見事なほど白く、パツと見は二十代後半くらいなのに、全体的な落ち着きもあってもっと年上にも見える。涼やかな瞳は空色で、『雨』に関連する店の名に反して、まるで晴天を映し込んだようだ。まさかカラコンではなく自前だろうか。

晴哉はその非現実的な美しさを感じる佇まいに、同性相手だというのについ見惚れてしまった。

「私はこの店の店主で、名はアマヤ。気軽に呼んで」

「は、はあ……アマヤ、さん？」

「うん」

頷きと同時に着物の裾が揺れた。この店のイメージカラーなのか、アマヤが纏う着物も羽織も、双子たちと同じ深い藍色だ。

格好も相俟って、存在自体が現実味に欠けている。

「よかったらどうぞ、そちらの席に座って」

「あつ、はい」

初対面の客相手にはフランクすぎる態度だが、嫌な感じはしない。

晴哉はおずおずと、勧められた席に座った。椅子を引いてくれたのはウイだ。アマヤにまとわりついているエンと違って、仕事のできる子である。

それにしても、名字なのか下の名前かは不明だが、もしや『アマヤ』だから、店の名前も『アマヤドリ』なのだろうか。

「この茶房についての説明はまだ聞いてなさそうだね。うちは雨の日にだけ営業していて、メニューは日替りのお茶セットのみ。代金なんかは取らないよ。タダで味わって帰ってもらえればいい」

「え……タ、タダでいいんですか？」

「うん。その代わり、君の会いたい人を教えて。ここに来たってことは、誰かいるんでしょ？ 必ず会わせてあげるから」

噂の大半は真実だったようだ。

しかし、お茶セットは無料な上に、会いたい人にも会わせてもらえるなんて、あまりに虫のよすぎる話ではなからうか。

なにか裏があるのでは……と警戒する晴哉に、ウイが慣れた調子で「大丈夫ですよ」と微笑む。

「私たちにとつては、お客様の『願い』を叶えることこそが重要なんです」

「そうそう、そうやって『徳』を稼ぎたいわけ」

エンもウイに同意するように頷く。

晴哉には正直味がまったくわからなかったが、下手な追及は止めておいた。

ここにたどり着くまでがすでに理解の範疇はんちゆうを超えているのだ。深く考えるだけきつと無駄である。

「ん？ これは？」

ふと、そこでアマヤが、椅子の背に引つ掛けた晴哉のスクールバッグに目を留める。

正確には、バッグについた『お守り』に、だ。

「あ……これはその、小さい頃に祖母にもらったものです」

巾着型のお守りは、一見すれば無地の青色だが、よく見ればうつつすら水玉模様みづたまがたが

入っている。目つきの悪い高校生男子が持ち歩くには、ミスマッチな代物だということとは本人も自覚済みである。

だがこれは、晴哉にとつてはとても大切なものだ。

「二年前に亡くなった祖母が、家にある古い服の布で手作りしてくれたもので。小学校に上がるときに、俺の身を助けるお守りだつて……あ、あの、アマヤさん？」

アマヤは食い入るようにお守りを見つめている。あまりに真剣なので、なんだなんだ!? と内心で焦る晴哉に、アマヤはポソツと「名前は何？」と呟いた。

「えっ？」

「名前。君の名前だよ」

「陽元……晴哉ですけど」

気迫に押されて素直に答えれば、先に反応したのはエンの方だ。「うちの店には一番似合わねえ名前だな」などとからかう彼を、またもやウイが「お客様に失礼だよ！」と慌てて注意している。

アマヤはいまだお守りを見つめたままだ。

「あの……」

「……そうか、君が」

なにかをひとりて納得したアマヤが、やっと視線を上げて晴哉に目を合わせる。すべてを見透かすような空色の瞳にドキリとした。

「すまないね、話が逸れた……本題に入るうか。君は誰に会いたいんだい？」

「え、ええっと、住んでいる場所も、本名さえも知らない相手なんですが……」

「問題ないよ。言ってみて」

晴哉は緊張で喉を鳴らす。

本当に。

本当にまた、『あの子』に会えるのだろうか？

「俺が会いたいのは、幼い頃に友達だった女の子です。もう一度……『オトメちゃん』に会わせてください」

*

それはまた、晴哉が小学校三年生のときの話である。

会社勤めの父は単身赴任中。母もパートで家を空けることが多く、共に遊ぶ友達などいなかった晴哉は、学校帰りや休日によく、少し離れたところに独りで住む祖母の元へ通っていた。

父方の祖母である陽元かさねは、夫に早く先立たれたこともあり、孫である晴哉をたいそう可愛がっていた。

彼女は歳などものともしないしっかり者で、若いときは美人だったことが容易に想像できる、品のいい老婦人だった。礼儀にうるさいところはあれど、面倒見がよく優しいかさねに、晴哉も懐いていた。

また当時、かさねの家の裏山で、凶鑑を片手に植物を見て回ることが、晴哉のささやかなブームでもあった。『山奥には入らない』というかさねの戒めをきちんと守り、凶鑑と同じ花や木を見つけては楽しんでいたので。

そんなある日のことだ。

「う、うう、ううう」

大きな木の根元で、女の子がうずくまって泣いていた。

歳は晴哉と同じくらいだろうか。襟元にリボンのついた臙脂えんじのワンピースを着て、

やけにオシャレなスクールバッグを抱えている。

バッグに縫われた校章は名門私立小学校のものだ。晴哉の通う学校とは一線を画する、家が裕福で頭もいい子が行く学校。そう思うとなるほど、少女が纏うワンピースは質がよさそうだ。

「ど、どうして泣いてるの？ どこか痛いのか？」

放っておくこともできず、晴哉は探り探りそう声をかけた。

ピクツと肩を震わせて少女が頭を上げる。

顔はぐしゃぐしゃに泣き腫らしていたが、気の強そうな猫目に、目の下に点々と三つある黒子が特徴的だった。

「……どこも痛くはないの。お母さんに、塾のテストの点数が悪くて怒られたのが悲しかっただけ」

「テスト？」

「そう。八五点だったから、怒られた」

それは十分いい点なのでは？ と晴哉はきよんとする。

初対面の晴哉を相手に、ぐずぐずと吐き出すように喋る少女の話を聞いていると、

どうやら彼女の母親はかなり厳しい『教育ママ』らしい。学校がない休日でも、家庭教師に塾に^{じゅく}と勉強漬けで、「お友達もできない」と嘆いていた。

そんな日々嫌気がさしていたところ、今回の件があり、少女は我慢の限界がきてこっそり家を飛び出したそうだ。

「家はこの近くの。気付いたら山の中まで来ちゃって……」

「だ、大丈夫なの？ お母さんにバレたら怒られない？」

「平気よ。私を怒ったあと、ママ友とのランチに出掛けちゃったもん。しばらく帰ってこないわ。私は家で大人しく勉強でもしてると思ってるんじゃない？」

話しているうちに少女はいつのまにか泣き止み、今度はふんつと拗^すねていた。内面に反して無表情が常な晴哉とは違い、表情がすぐに出る子だ。

少女のお家事情も気になるが、それよりも晴哉は彼女の「友達がいらない」という発言が気になっていた。

自分と同じだ。

少女は晴哉の目つきも怖がらないし、普通に接してくれている。

これはもしかして、お互いの初めての友達になれるのでは……と、晴哉は密かに期

待を抱いた。

「そういうあなたは？　こんなところだなにしてるの」

「えっと、お、俺は……」

晴哉も祖母の家が近いことと、ここでよく独りで遊んでいることを伝えた。

すると少女に、ズバツと「なんだ、あなたもお友達がないのね」と凶星を指されてプチダメージを喰らったが、そのおかげで「それなら私と友達になってよ」と少女から言い出してくれた。

「今日みたいな日曜日のお昼は、お母さんは『ママ友の集会』があるの。今度からも抜け出すつもり。またここに来るから。毎週私と遊んでよ」

「遊んでって……」

「あなたがいつもしてることでいいわよ」

植物ウォッチングに付き合ってくれるらしい。

少女は泣いていたときの儂さなど見る影もない、なかなか強引な性格だが、晴哉はふたりに山を歩き回る想像に胸がドキドキしていた。

それはとっつてもとっつても楽しそうだ。

「そうだ、あなたの名前はなんていうの？」

「は、晴哉」

「ふーん、じゃあハルクんね。私のことは……そうね、オトメって呼んで」

「オトメちゃん？」

「うん。これからよろしくね、ハルクん」

少女はスツと白い手を差し出し、「それとハルクんは、もつと笑った方がいいわよ」と、まるでお手本のように可愛らしい笑顔を見せた。

これが晴哉と少女——『オトメちゃん』の出会いであった。

それからふたりは、山の中で週に一度集まって遊ぶ友達になった。待ち合わせ場所は最初に遭遇した大きな木の下。

『オトメちゃん』は晴哉よりは確実に頭がいいはずだが、植物の知識は皆無なようで、いつも晴哉の植物解説に猫目をキラキラさせていた。そうかと思えば、唐突に「笑顔の練習！」などと言い出して、晴哉の表情筋を鍛えることに精を出したりもした。練

習は残念ながら実を結ばなかったが。

また雨天の日などは、晴哉はかさねの家に『オトメちゃん』を招待した。晴哉が初めて連れてきた友達にかさねは大興奮し、「おやつをいっぱい作ってん。たあんと食べまっし」と、得意のお菓子作りの腕を大いに振るっていた。

会える日や時間は限られていたが、晴哉にとって『オトメちゃん』はとても大切な存在だった。ずっとずっと、こうしてふたりで遊べると思っていた。

だけど『別れ』というものは突然、予告もなしにやってくる。

「……オトメちゃん、いないの？ オトメちゃん？」

出会ってからもうすぐ一年に差し掛かる頃。

その日は小雨が降っていたので、晴哉はカッパを着て、慣れた調子で待ち合わせ場所まで来ていた。しかしいくら待ってみても、いつこうに『オトメちゃん』は現れない。

だがそのときは、晴哉はそこまで気にしなかった。急に塾の模試が入ったとか、お母さんの『ママ友の集会』が中止になったとかで、『オトメちゃん』が来ない日は過

去に何度かあったからだ。

しかし次の週も、また次の週も、またまた次の週も……『オトメちゃん』は現れなかった。

それでも諦めずに、晴哉は待ち合わせ場所に通い続けた。

一年近く一緒にいたというのに、晴哉は『オトメちゃん』の連絡先も家の場所も、本名だって知らない。学校はわかるがそこまで押し掛けるのは躊躇ためらわれた。

そんな晴哉にできるのは、再び『オトメちゃん』が来てくれることを信じて木の下のただ待つことだけだ。

だからたとえ……酷い大雨が降りしきる中でさえ、約束の日曜日が来たなら、山に行かなくてはいけない。

かさねから「行ってはいけない」と釘を刺されていたが、危険を顧みずに向かった。そうしたら案の定、転んで怪我をして動けなくなり、晴哉はあわや死ぬのではないかという目に遭った。助かったのは奇跡と言ってもいい。

……ただこの日のことに関しては、晴哉の記憶は途中から曖昧あいまいだ。

どうやって助かったのかはわからず、気付けばかさねの家の布団の上で眠っていた。

かさねに聞いてもはぐらかされ、答えの代わりにきついお説教を喰らう羽目になった。何度も「心配かけてごめんなさい」と繰り返しながら、そこで晴哉はようやく悟ったのだ。

自分は今もう、『オトメちゃん』には会えない。

彼女はなくなってしまったのだ——と。

そしてこの大雨の日の事件以来、晴哉はたくさんの思い出が詰まった裏山にすら、二度と立ち入ることをしなくなったのであった。

*

「そのときに諦めたつもりだったんです……でもあれから何年も経ったのに、いまだにふとした瞬間に彼女のことを思い出してしまっただけでも、会って確かめたいんです」

拙いながらも語り終えて、晴哉は俯く。

教室でこの茶房の噂を聞いてから、実はずっと『オトメちゃん』の姿が脳裏を離れなくて困っていたのだ。あまりにもいきなり離れ離れになってしまったので、本音を言えば未練なんてありまくりだ。

竹んだまま話を聞いていたアマヤは、空色の瞳を細めて「わかったよ」と微笑む。

「まずはお茶セットの準備をしてくるから、少し待っていて。エン、ウイ、手伝ってくれる？」

「おう」

「はい！」

藍色の裾と白髪を翻して、アマヤが暖簾の向こうに消えていく。エンとウイもそれに続いた。

騒々しい双子がいなくなると、静かな店内に満ちるのは外の雨音だけ。

雨はまだまだ降り続けているらしい。

残されて手持無沙汰になった晴哉は、そわそわと落ち着かない気持ちに耐えかねて、スクールバッグからスマホを取り出した。メッセのやり取りをする友人などは皆無な

ので、ニュースでもチェックしようかなと思っただのだ。
しかしどうしたとか、勝手に電源が落ちている。
試行錯誤してもまったくつかない。

「マジか……」

ここに来るまでは問題なく機能していたし、充電切れなんて事態でもないはずだ。
ただ壊れただけでも考えられるが、晴哉にはこの茶房にいることこそが、原因な気が
してならなかった。

そこで改めて、この奇妙な空間について考えてみる。

ツバメに誘われて店に着く前、見知らぬ異次元に紛れ込んだのでは……と案じたこ
とは、おそらく間違ではない。ここは金沢の『ひがし茶屋街』であって『ひがし茶
屋街』ではない異次元なのだ。

そんなここで働くアマヤも双子も、下手をしたら人間ではない可能性がある。むし
ろ人間じゃない方がしっくりくるくらいだ。

だが怖がりな晴哉にしては不思議と、この状況を怖いとは感じなかった。

それはエンが人懐っこいせいかな、ウイが単純に可愛いせいかな。もしくは茶房の主人

であるアマヤが、スルリと人の心の内側に違和感なく収まるような、独特の雰囲気
持っているせいかな。

そう、それに。

「あの瞳の空色、どこかで見たような……」

「空がどうしたんだい？」

「うわっ！」

いつのまに現れたのか。存外近い距離にアマヤがいて、晴哉は椅子の上で飛び上
らんばかりに驚いた。

慌ててスマホをバッグに仕舞う。

「驚かせちゃってごめんね」

「い、いえ……」

ひとりで戻ってきたアマヤは、片手に朱色のお盆たせを携えていた。それに載せて運
んできたものに、晴哉の意識が吸い寄せられる。

「これは……あんころ餅？」

四角い白磁の器に、ころころと鎮座ちんざするふたつの丸い茶色の和菓子。

餅があんこの衣を纏まとっていることから、『あんころ餅』という名が付いたこの菓子は、金沢では定番のお茶請ちやうこうけだ。

「甘いものは好き?」

「わ、わりと……祖母がよく作ってくれたので。俺にはその、似合わないでしょうけど」

「好きなものに似合う、似合わないがあるのかい? 好きなら好きでいいじゃないか」
ごもつともな意見だ。

晴哉は卑屈なことを言ってしまったことを小さく反省する。

それに金沢は『菓子処』としても有名であり、全国的にも金沢の人は、一番お菓子を食べる県民であるという統計も出ている。

開き直って、晴哉が「本当はわりとじゃなくて、大好きなんです」と言い直せば、アマヤは嬉しそうに器をテーブルに置いた。

「上に振ってあるこれは金箔きんぱくですか?」

「そう、彩りが加わっていいだろう」

よく見たらあんころ餅には、キラキラと輝く金箔も散らされている。

金沢といえば金箔。

生産環境が適しているため、金沢の金箔生産量は日本で群を抜いている。さらびやかな食用金箔と、落ち着いた色合いの和菓子は、見た目の相性も抜群だ。

なにより晴哉にとつて、あんころ餅は特に縁深いものだ。

「祖母の作るお菓子の中で、特に好きだったのが特製のおんころ餅だったんです。祖母も一番よく作ってくれて……小豆あずまを丁寧ていねいに漉こし器きで漉して、滑らかにするんです。一緒に食べた『オトメちゃん』も絶賛していました」

「じゃあこれは、ふたりにとつて思い出のお菓子だね」

「はい……いただきます」

かさねに躡しけられた習慣で、きちんと手を合わせてから、晴哉は竹製の菓子楊枝ようじであんころ餅を口に運んだ。

「ん……!」

ほどよい塩味と甘さが舌にじんわり広がっていく。餡あんの中に隠れた餅が、しつかりとした噛み応えのある食感を生んだ。ゆっくりと咀嚼そしすれば、過去にかさねが作ってくれたものと、とても味わいが似ている気がした。

『オトメちゃん』と、かさねのあんころ餅を頬張った記憶がよみがえる。

『ハルくん！ かさねさんのあんころ餅は、今日も最高ね！』

『オトメちゃんが来る日は、おばあちゃんもいつもより張り切って作っているんだよ』

『嬉しいわ、何個でも食べられそう！』

『……あ、でも』

『もう、わかっているわよ。最後のひとつは食べちゃダメなんでしょう？ ちゃんと残してあるから』

……そう。

最後のひとつのあんころ餅だけは、ふたりとも決して食べなかった。

それにはちゃんと理由があったのだが、そこでアマヤに「手が止まっているよ、どうかした？」と声をかけられ、晴哉は過去から帰還する。

食べかけのあんころ餅を食べ終えて、添えられた湯呑みのお茶も一口。

温かい緑茶が体を満たす感覚に、晴哉は「ほう」と息をついた。

「お菓子もお茶も美味しいです。これ、本当にお金を払わなくて……ん？ なにか聞こえませんか？」

「ああ、ようやく連れてきてくれたみたいだ」

不意に晴哉の耳に、出入口のドアの方から、雨音に交じって複数の声が聞こえてくる。

「ね、ねえ、ちょっと君たち!! いったいどこから現れて……ここはなんなの!? 私、さつきまで学校にいたはずなのに……!」

「あーあーいいから、いいから。つべこべ言わず入れって」

「中でああなたをお待ちの方がいますので」

声は三人分。

内ふたりはエンとウイだ。ふたりはアマヤに続いて店の奥に消えたはずだったが、裏口からでも外出していたのか。

そしてもうひとり——。

「はいよ、一名様追加でーす!」

エンが片手で元氣よく戸を開け放つ。

双子に両手をガッチリ取られて入ってきたのは、セーラー服姿の少女だった。胸ポケットに描かれているのは、こちら辺の高校では見ない校章だ。スラッとした細身の肢体したたに、黒髪ロングの癖ひとつないストレートヘア。背筋がピンツと張つていて姿勢がいい。

成長しているのは当然として、晴哉の知るあの頃の面影おもかげが確かにある。なにより特徴的な猫目と目の下の三つの黒子が、ずっと求めていた相手が彼女であることを、はつきり晴哉に伝えていた。

「オトメちゃん……」

「その呼び方……え、まさか、ハルクくん？」

ああ、本当に『オトメちゃん』なんだ。

懐かしい『ハルクくん』という響きに、晴哉は胸が詰まる想いだった。自分のことをまだ覚えていてくれたのが嬉しい。こんな奇跡のようなこと、目の当たりまにしてもまだ信じられない。

だが驚いているのは相手も同じだ。いや、いきなりこんなところに連れてこられた分、彼女の方がさぞ困惑していることだろう。

「ほ、本当にハルクくんなの？　なんで大きくなったハルクくんが……？」

「それが俺にも理解がまだ追いついてなくて……」

「結局ここはどこなの？　私、これから友達と約束があつて、学校の図書室で時間を潰していたはずなんだけど」

……いまの彼女には自分と違って、ちゃんと別で『友達』がいるんだなという、刹那せつの寂しさは置いて。

晴哉はどう説明したものかと悩んだ。

おそらく双子は、晴哉には理解の及ばない人知を超えた力で、強引に『オトメちゃん』をここに連れてきたに違いない。

それならば一刻も早く元いた場所に帰してあげなくては。彼女は待ち合わせの最中だったというなら尚更だ。

「アマヤさん、あの！」

「大丈夫、そこは問題ないから」

無表情の下で焦る晴哉に対し、アマヤはそつと、晴哉の思考を読んだように屈かんで耳打ちする。

「『ここ』では時の流れが違うんだ。こちらでどれだけ時を過ごそうと、『あちら』に戻ればほんの数分意識を飛ばしていた程度。エンとウイには、ちゃんと連れてくるタイムリングも指示してあるから、彼女の迷惑になるようなことはないはずだよ」

「は、はあ……」

有無を言わずに綺麗な顔で微笑まれたら、晴哉は頷くことしかできない。囁かれた内容はファンタジーすぎるが、なんだかもう一周して慣れてきてしまった。

アマヤは流れるような所作で『オトメちゃん』に向き合う。

「ようこそ、『あまやどり茶房』へ。ここは雨の日だけ、会いたい人に会える金沢の茶房。心行くまで一服していくといいよ」

「あまやどり茶房……？　なんで東京から金沢に……」

「ふむ……手っ取り早くご理解頂くには、ここは君の夢の中のようなものだと思ってもらえると」

「ゆ、夢？」

「君はお友達を待っている間に、図書室の席で眠ってしまったんだ。さあ、まだご友人が来るまでには時間があるから。夢から覚めないうちに、こちらでお茶とお菓子で

も。すぐに用意するので」

アマヤは強制的にもろもろを『夢』だと説明して、だいぶ強引に『オトメちゃん』を丸め込んだ。双子の「さあさあ、お早くどうぞ」「座れ、座れ！」という連携プレーにも押され、彼女は戸惑いながらも晴哉の正面に腰掛ける。

「それでは、どうぞごゆっくり」

そう告げて、またしてもアマヤは双子を連れて店の奥に消えていった。

残された晴哉たちの間には、なんとも気まずい沈黙が下りる。

そもそも軽率に「会いたい」などと言ってしまったが、いくら晴哉が会いたくとも、『オトメちゃん』が会いたがっていたとは限らない。存在を覚えてもらったのは僥倖だが、それだけだ。

迷惑に思われていたらどうしよう。

いまさらになって多大な不安が晴哉を襲う。

「あの、さ。ハルくん……えっと」

晴哉がもだもだしているうちに、口火を切ったのは『オトメちゃん』だ。

「ただの夢っていつてもさ、すぐリアルだから。ハルくん、小学生の頃から凶悪な目つき変わってないし。本当にハルくんだと思って話すね？」

「あ、ああ、うん」

「……その、夢でもさ。また会えて嬉しい」

「えっ」

「ずっと会いたかったの」

睫毛を震わせて、『オトメちゃん』は小さくはにかむ。

その顔は記憶より大人びていて、だけど笑うと猫目が緩む様は昔のままだ。

晴哉の不安は一気に吹き飛ばされてしまい、真顔のまま頬が熱くなる。なんとか小聲で「俺もずっと会いたかったんだ」と言えば、軽やかな笑い声が返ってくるのだから、たまたまなく気恥ずかしい。

「私ね、ハルくんに謝りたかったの。あれだけ仲良くしてもらったのに、なんにも言わずにいなくなっちゃったこと、ずっとずっと後悔していたから」

「……なにか理由があつたんだよな？ オトメちゃんなの」

「——みお」

「え？」

脈絡もなく飛び出た単語に、晴哉は意表を突かれる。

「理由を話す前にその呼び方、いまさらだけど訂正させて。『オトメちゃん』は名字から取って適当に名乗っただけ。本名は早乙女^{さわとめ}漣^{みお}。漣って呼んで」

「み……漣、ちゃん」

「うん」

満足そうに頷く『オトメちゃん』——もとい漣。

「紛らわしくてごめんね。あの頃は下の名前が嫌いだったから……」

「いまは嫌いじゃないんだ？」

「……うん」

ランプシェードの淡い光が、ふたりを包むように揺れている。

それから漣は、なぜいきなり晴哉との待ち合わせ場所に来なくなったのか、その理由を話し始めた。

「簡単に言うと、お母さんに家を抜け出していることがバレちゃって。一年近く隠し

通してきたんだけどね。お母さんはめっちゃくちゃ怒って、私への監視の目がさらに厳しくなってるさ。そんなときに、お父さんの急な東京への転勤が決まって……家族で引越すことになったの」

「そうだったんだ……」

先ほどアママの説明に対し、「東京から金沢？」と驚いていたので、滯の現住居は東京なのだろう。ここ石川県からは、北陸新幹線で二時間半で着くが、けっして近いとは言えない距離だ。

「ハルくんのところに行こうにも行けなくて、そのまま金沢を離れちゃって。なにも告げずになくなって、本当にごめんさい……っ！」

「い、いいから！ そんな事情なら仕方ないって！」

滯はテーブルに額がつきそうなほど深々と頭を下げる。

晴哉はネガティブ思考で、「もう自分に愛想を尽かしたから来なくなったのでは？」とか想像していたので、むしろ安堵したくらいだ。

嫌われたわけじゃなくてよかった。

それなら、残る気がかりはひとつだけだ。

「答えにくかったら、その、答えなくていいんだけど。滯ちゃんとお母さんって、いまはどういった感じなんだ……？」

滯と母親の関係については、晴哉は当時から幼心にも気を揉んでいた。

結局、滯の涙を見たのは出会いの場面のみだったが、母親に対する鬱憤うづみだはよく聞かされていた。それでも母を嫌いにはなれないのだ……ということも。

デリケートな問題なので、尋ねるのには躊躇ちゅうちゆいがあつたが、こんな最高の機会を設けてもらったのだ。

いま聞いておかなくては。

しかし緊張感たっぷりの晴哉に対して、滯はあつけらかんとした顔で打ち明ける。

「それがね、いまはすごく良好なの！ というのもさ、引越しを機に家族で話し合いの時間が持てる。仕事ばかりなお父さんにお母さんは不満をぶつけたし、私もお母さんにもっと自由にさせて！ って、やっと言えた。都会住みは慣れなかったけど、その分家族で協力するようになって……お母さんの性格もだいぶ穏やかになったんだよ」

「そっか……あのさ、滯ちゃんが下の名前が嫌いだったのって、たぶんお母さんが原

「困だよな？」

「うん。お母さんはいつも怒った声で私の名前を呼ぶから、少しずつ嫌いになったんだよね。でもいまは大丈夫」

心配してくれてありがとう、ハルクン。

それを聞いて、晴哉は今度こそ肩の力を抜いた。

滯が自分から離れたのは致し方ない理由があつてのこと。また彼女はいま、家でも笑つて過ごせている。そのふたつの事実がわかっただけで、晴哉の長年抱えていた引つ掛かりは、ゆるゆると溶けて跡形もなく消えてしまった。

滯に会わせてくれた双子とアマヤ、この茶房には感謝しかない。

「ねえ、さっきから私の話ばかりだね？ ハルクンはどうなの？」

「は？ 俺？」

「友達はできた？ 学校は楽しい？」

身乗り出さんばかりの勢いで、滯は親戚のおばちゃんみたいな質問を投げかけてくる。晴哉はまさかの自分に向けられた矛先に動揺を隠せない。

さすがに「いまでも学校で友達ゼロのぼっちです」とは言えなかった。晴哉にだっ

て見栄やプライドはあるのだ。

だが滯は幼き日と変わらぬ強引さを發揮して、やたらぐいぐい来る。

「もしかして彼女とかできた？」

「できてない！」

「ふーん……まあ、私も彼氏とかいないけどさ。ハルクンはきっかけがあれば絶対モテるのに。好きな子は？ いないの？」

「いないってば！ ちょ、顔近いから！」

ついにテーブル越しに立ち上がって顔を寄せてくる滯に、晴哉はしどろもどろである。

勘弁してくれ……！！ と思つたところで、「お、盛り上がってんなあ」と明るい声が割つて入る。

「もう、エン！ まだ様子見しようって言ったのに、水差しちゃダメだよ！」

「仕方ないだろ、様子見なんてしてたら茶が冷めるんだから。ほい、あんたの分のお茶セットな！」

双子がわちゃわちゃしながら出てきて、エンの方が滯の前に軽い調子でお茶セット